# 2026年度
# 第２回神戸市総合教育会議

と　き　　2026年９月９日(水)

15：00～16：30

ところ　　神戸市役所１号館14階　大会議室

神戸市企画調整局大学・教育連携推進課

## １．開　　会

○久元市長

教育長、また、教育委員の皆さま、お忙しいところご出席をいただきまして、ありがとうございます。

今日のテーマは３点です。神戸市立高校の魅力化、そして、コベカツが９月からスタートいたしましたので今の状況を説明していただき、ご意見頂戴したいと思います。また、神戸市教育大綱を策定して 10 年が経過いたしましたので、大綱を改定する必要があるのかどうかも含めてご意見をいただければと思います。

## ２．議題　市立高校の今後のあり方について

○久元市長

市立高校の魅力化につきましては、５月１日の第１回総合教育会議にて、議論していただきました。この議論を踏まえて、プランを策定していくという観点から、教育委員会事務局において、市長部局とも相談をして、準備が進められてきたかと思います。その状況につきまして、教育委員会事務局から、現在のプランの策定・準備状況について、説明をしていただきたいと思います。

資料１「市立高校の魅力向上に向けたプランの策定」について、教育委員会事務局より説明。

○久元市長

それでは、前回に続きましてご意見をいただければと思います。

○正司委員

２点あって、１点目は、たまたま市立高校の校長先生とお話しすることがあって、デザインや学科の話についてどうですかと聞きましたら、すごく期待している、これをどう生かすのかを学

校の中でも議論している。ぜひ生徒の皆さんの力を生かしながらやりたいし、我々の学校の特色を打ち出し、更に上昇できるようにしないといけないのでありがたいという話をされていました。そういうふうに前向きに捉えてくれて、負荷と思っていないことが分かり、ある意味ほっとしながら、良かったと思っています。

もちろん市立高校に通っているお子さん全員が神戸市の高校生ではありませんが、プランが市立高校を良くしていく、市立高校が頑張ることによって、私立高校も県立高校も、同様に頑張っていかれるのではないかと思います。それぞれの学校ごとの特色を出されると思うので、市立高校としての特色を出していく上で、４つの視点というのは非常に重要であり、取り組んでいくことは大切だという印象です。

神戸市立高校が目指すべき方向性に関して、ここに書いていることは正しいと思いますが、これだけを見ると少し神戸という印象が薄れるのではないかという気がして、少しもったいないのではないかと思いました。

○久元市長

ありがとうございます。

○吉井委員

プランの方向性として３つ書かれている中で、最初の「AI・DXに代替されない能力・個性の伸長」というところは、少し文章としては分かりにくいかもしれませんが、これは文部科学省が出しているN-E.X.T.ハイスクール構想の目的のところの定義に、AIに代替されない、自ら問いを立てて他者とともに価値を創り出す力を育てるということが書かれていますので、そこから文言を引っ張ってきたということで、内容的には、AIのリテラシーを上げていくということで、代替されない能力って非常に遠い言い回しですが、うまく活用して新たな価値を生み出すという意味では、神戸に限らず高校に求める一つの方向性だと思います。

神戸らしさということで言うと、２番目「グローカル・イノベーション人材の育成」がそれに

当たると思います。グローカルと書いていますが、神戸は歴史的にもグローバル視点でのアセットもたくさんありますので、うまく活用するというのが神戸らしさにつながると思いますし、神戸そのものをより定着してもらうという意味でも、グローバルとローカルを合わせた造語である「グローカル」という言葉を使うことが非常に適しているのではないかという感触を持っています。

〇久元市長

ありがとうございます。

正司委員からは、市立高校の特色をどう出していくかという問題提起がありました。吉井委員からは、「グローカル」というところに神戸の市立高校の特色が出てくるのではないかというご意見をいただきました。

やはりプランをつくる上で、市立高校の存在意義、無理に差別化を図る必要はないと思いますけれども、公立高校として市立高校が役割を果たしていく際に、県立高校とどういう違いを生み出していくのかということは非常に大事な点だと思うので、そういうことも含めてご意見をいただければと思います。

〇本田委員

学識者の意見にもありましたけれども、社会ともっと密に繋がるとか、今の子どもたちに色々な経験をしてもらうとか、様々な価値観を学んでもらうというところで、神戸市にある大学や企業等、様々なリソースをうまく活用しながら一緒にやっていくというところに神戸らしさが出てくるのではないかと思います。前回の議論にも出ていたと思いますけれども、ほかの政令指定都市やほかの市でも考えられているのかもしれないですが、神戸市でどういうところを活用できるのか、どう連携できるのか、また、せっかく小・中学校もありますので、小学校、中学校とどう連携できるのかというところを具体的に掘り下げていくことは、すごく重要なのではないかと思っています。

プランの４つの視点はすごく大事だと思いますし、現在も既に市立高校にはそれぞれ特色があって人気も出ているということですので、今の子どもたちや保護者のニーズにも沿っているのではないかなと思っています。

〇今井委員

私もこの間、保護者として市立高校の一つにオープンスクールに子どもと行ってきました。実は行ってみるのは初めてで、あまり詳しいことも分かっていない状態でしたが、子どもはすごく気になっていた学校でした。

オープンスクールの取組も去年までと様々変わっており、生徒さんたちがすごく生き生きと学校の様子を語ってくれる場面が多く、色々なことが伝わってきて良かったと思っています。

今の市立高校には本当に良いところがたくさんありますので、それを今の中学生、あるいは小学生にも、本田委員から話のあった連携の中でもっと伝えていくことができればより良いと思いました。

今は、中学３年生の秋のオープンスクールの時期になって初めて学校を見にいきましたというお子さんもかなり多いと思いますので、連携を深める中で、市立高校の魅力がもっと子どもたちや保護者に伝わっていけば良いと思っています。

今立てているプランも、子どもたちや保護者、学識者、企業の方々の意見を反映しながら進められていますので、こういう議論をしていること自体も含めて、この会議もそういった場ではありますが、より広く伝わっていけば良いなと思っています。

〇山下委員

前回から引き続き色々考えてみて、また、教育長や教育委員と話し合う中で、やはり今の市立高校が果たしている役割というのは、目には見えないけれども、すごく大事な役割や効果を果たしていると痛感しました。

一言で言うと、昔から言われていることでもありますが、高校は地域の文化拠点になっていて、

神戸の市立高校というのはまさにそういったところで、少し私立高校や県立高校とは違う独自の役割を果たしていると非常に思いました。

学校を拝見した際も、本当に総合的な人文社会科学、自然科学、あるいは文化芸術に至るまで、その存在そのものが文化を体現している面があることを非常に痛感したところです。

そういった意味では、高校が昔できたときは進学者数が限られていたと思いますが、本来はおそらく市町村単位できちんと持っておくことが望ましかったのではないかと。

そのことによって、地域の大人がつくっている文化が高校生から中学生、小学生へ、また小学生から中学生、高校生、そして地域へという形で還流していたのではないかということを神戸の高校を拝見し、すごく痛感したところです。

言語化はあまりされないですが、先生方がされていることを拝見していると、まさにそういったことだなということを感じることがありました。

他の教育委員からもご指摘があったのですが、例えば、ものづくりが盛んな地域のお子さんたちが、神戸市立高校のものづくりに関する取り組みに触れる機会があって、そうしたところに進学しようと志すお子さんがいる。

そういったことがある以上は、私たちが気付きにくいところで、子どもたちの心に働きかけている部分があって、改めてきちんと意識しておかなくてはいけないと思いました。

文化拠点ですけれども、文化は時として他の人を排除するような役割も果たすことがあります。例えば、高校生や中学生、小学生に最先端の技術に触れてもらうというのもとても大事ですけれども、逆に自分には無理だというような気持ちが働いて、文化が排除の機能を果たすこともあります。けれども、市立高校があることによって、そうならないような埋め合わせ方を考えていく必要がある、そういったことを考えることができるのではないかという気もしました。

先ほど休憩時間に話している中で、教育長が小学生等にはまだまだアウトリーチしていない部分があるので、もっとできるのではないかということをおっしゃっていて、なるほどと、すごく考えさせられました。

例えば、神戸が大事にしている先端医療について、いきなりそれに触れてもらうと、ほとんど

の方が難しいと感じるかもしれませんが、それを支えている地元企業は一体どういうことをしているのか。実は、町工場で作っているというようなことも含めて、連続性の中で物事を捉えるというような、そういった先端に触れる機会が、もしかしたら高校を拠点にできる、できるべきであるし、そういうポテンシャルが残っているのではないかと思いました。

また、このプランはよくできているなと、教育委員でありながら感心していました。本当に教育委員会事務局に色々ご尽力いただいたと思います。ただ、この中にもう一つ、地域の大人の中で高校生が認められる経験みたいなものも、少し柱に含んでも良いかなと思いました。

これは全く別の都市での事柄ですけれども、関西でも非常に有名になった市立高校の取り組みがあります。あまり語られませんが、学習成果の発表会や研究発表会の際に、地域の人たちに対して発信する機会がふんだんにあったということが、実は重要だったのではないかとも言われております。SNS が普及して、高校生や中学生を見ていると、キラキラした人生が SNS の中に溢れています。自分も認められたいと思い、同じような認められ方を求めることを否定するわけではありませんが、生身の人と人との間で認められる経験というのを、やはり神戸の高校生には経験してもらいたいと痛感しております。

〇久元市長

今、小学校、中学校との関係というお話もありましたし、山下委員からは教育長との雑談の話もありましたので、教育長、いかがでしょうか。

〇福本教育長

市立高校がなぜ支持されているのかということを考えたときに、言い方が適切かどうか分かりませんが、「かゆいところに手が届く」ということだと思います。

高校になったのだからあなたたちはこうして当たり前だ、高校が用意したプログラムについてこられる子はついてきなさいという昔の文化が、今でも残っている学校もありますが、神戸の市立高校はそうではなく、生徒や保護者、それぞれのニーズに合わせながら歩んできた。それが今

の激変の時代にすごくマッチしたので、受け入れられているのではないかと思います。このプランも、結局そういうことをやろうとしていると思いますので、やはりそれが大事だと思います。

また、教育委員会が市立高校を所管しているということは、結局、小・中学校の教育にも大きな影響を及ぼすのではないかと思っています。

それは、我々が色々な施策を進める中でも、常日頃から思っていることなので、やはり市立高校が輝くことは、神戸の義務教育の子どもたちも輝くことにつながるのではないかと思います。ですので、こういうプランを立てて検討していただくことは本当にありがたいと考えております。

〇久元市長

ありがとうございました。

ほかに、これまでの議論も踏まえてさらにご意見があればお願いします。

〇吉井委員

少し付け加えてお話を申し上げます。前回の総合教育会議のときにもお話がありましたし、今日の説明にもありましたけれども、企業が高校と接触する機会がこれまで少なかったと思っています。

この間の総合教育会議以降、神戸商工会議所と教育委員会を繋いでいます。実践的な探究活動にしろ、データをやはり企業側からも提示しなければならないということで、ある意味一緒に研究活動できれば良いなということで、今繋いで取り組もうとしているところです。

〇本田委員

先ほど高校生のために地域のリソースがどう使えるかというお話をしましたが、皆さんの議論を踏まえて、高校自体が地域や神戸市にとってどういうリソースになり得るかという、両方の視点で考えられるとすごく良いのかなと思いました。

私も大学におりますけれども、大学から見て、神戸市の各高校にどういう特色があって、どん

な子どもたちがどういうふうに育てられていてというのを知ることができると、こういうふうに連携していこうとか、一緒に育てるといった視点も出てくると思います。企業ももちろん同じかなと思います。それが例えば小学生、中学生にとって、高校生や高校がどういうふうなリソースになるのかという相互作用として見ることができると、より神戸らしい形が出てくるのではないかと思いました。

〇正司委員

ほかの委員の方と重なるような意見になるかもしれませんが、全日制だけでも５校持っているわけで、これを多いと見るか少ないと見るか、色々な考え方があると思います。多彩な街並みがある神戸で発展してきたその中で、高校生を５校それぞれの特色で育てているというのは、一つの特徴であり、誇って良いことなのではないかと思います。

特に、何人かの委員もおっしゃっていましたが、小・中学校との教育の連携ということで、小・中学生たちを教えている、そこでの体験というか、子どもたちや社会のニーズを肌で感じ、それに応じて高校教育のあり方を、対応変更しやすい立場にあると思います。もちろん守るべきものは守りますが、５年や 10 年というスパンで見ると、すぐに変わっていく。実際、市立高校はそういう形で変化してきたからこそ、少なくとも受験生から、高い評価を得るようになっているのではないかと思います。これまでの努力が評価されていると思いますし、市立高校の努力を更に続けることが神戸市全体の高校教育の向上につながり、将来を担う若者、神戸から世界へ羽ばたく若者を育てることができるのではないかと期待しています。

〇久元市長

これまで、市立高校が目指すべき方向性について議論していただきました。

やはり総じて、市立高校は基礎自治体である神戸市が設置しているわけですから、地域と一番近いところにあるわけですよね。

ですから、地域との良い関係をつくる、相互作用を及ぼしながら地域に密着した存在であると

いうことです。地域からも様々な参画をいただき、また同時に、市立高校が地域にとってのリソースになって地域に貢献していくという地域との関わりが、市立高校の存在意義としてあるということは間違いないのではないかと思います。

さらに、神戸市教育委員会は小・中学校も所管しているわけですから、そこはやはり大きな強みであり特色だと思いますから、小・中学校との連携、繋がりを作っていく。また教育長からお話がありましたように、市立高校の教育内容というものが小・中学校にも良い影響を与えるという存在になるということですね。

さらに、いただいたご意見の中で、私なりに解釈したのが、神戸市は基礎自治体として地域に一番近い存在であると同時に、指定都市として大都市自治体ですから、市内の企業、大学、団体など、様々な繋がりがあります。総合的行政主体としての神戸市の立ち位置をうまく活用して、より様々な方々の意見を取り入れていくことができうる立場でもあるわけです。そういう視点も入れた大きな方向性を考えていくことができれば良いなと思います。

残りの時間は、具体的な取り組みについてです。３ページ、４ページの施設・設備のリニューアルや、学科再編、教員の能力・資質向上、外部人材の活用、あるいは学級数の変動などもあります。特に施設・設備のリニューアルについては、正司委員からは、デザインの話に期待が大きいという話もありましたが、ご意見をお聞かせください。

また、教育委員会事務局に１つ質問させてもらいたいのですが、トイレに対するニーズが非常に強く出ていますね。そんなに状況が悪いのでしょうか。

〇教育委員会事務局

ひどいということではないと思います。前回の総合教育会議でご紹介した他校の事例で言いますと、乾式のトイレであるとか、和式・洋式ということだけではなく、壁紙も含めて明るい空間の整備を望む等、そういったことをおっしゃっているのではないかというふうに推測しております。

〇久元市長

　和式トイレはまだ残っているのでしょうか。

〇教育委員会事務局

　若干あります。

〇久元市長

　和式は全部なくした方が良いのでしょうか。これは教育委員会で考えてもらったら良いと思いますが。

〇教育委員会事務局

　設置するときには一定数残すという議論もありましたが、お子さんのニーズなどを加味しますと、やはり洋式化と思っております。

〇本田委員

　プランの方向性のところに、「AI・DXに代替されない能力」があり、創造性や何かを生み出す力等、対面で皆さんが心地よく学んでコミュニケーションができるというところからの創造性ということになりますと、資料にも書かれていますが、コミュニケーションが取りやすいようにとか、生徒の中には、自習室だけではなくてフリースペースという意見が出ています。これは、学校だけに限らず、最近は企業でも大学でも、みんなが会話しやすい、隙間時間に色々話ができるような場所で、デザイン性も良く、創造性が高まるような場所をテレビ等でも見ると思います。そういったところは、お金はかかることになりますが、やはり目指すべき方向性からすると大事なのではないかというふうに思います。

○正司委員

生徒さんのヒアリング結果を見ると、くつろげる場所が高校に欲しいと中学生のみなさんが答えているのですが、高校は比較的スペースがありますので、デザインが良く、くつろげる場というのはやはり必要だと思います。

ただ問題はそこから先で、その場でみんながわいわいできる雰囲気を作る必要がありますが、先生が「わいわいやって良いよ。」と言うだけではなかなかそうならないので、そこでの仕掛けづくりが重要だと思います。それを先生が全部面倒を見ることは大変だと思っています。図書館には司書がいるように、バックヤードで支えて、例えばIT系のことだったら相談できる人がいるとか、生徒たちの探究活動を支えるようなサポートの仕組みも、これから求められるのではないかと思っています。何でも先生に頼るという状況を少し変えていければ良いなと考えています。

○久元市長

ありがとうございます。

特に施設設備の話ですね。デザインについては、デザインの専門家の意見などもこれから聞きながらプランを作るのでしょうか。

○教育委員会事務局

はい。生徒たちの声を聞くときにも参画いただきましたが、企画調整局とも連携しまして、専門家の意見も取り入れながら、子どもたちの声も取り入れて進めていきたいと考えています。

○久元市長

探究ルームというのは、今もあるのでしょうか。これから新しく作っていくのでしょうか。

○教育委員会事務局

呼び名は色々あると思いますが、通常の教科科目の授業を行う教室とは別で充実させていきた

いと考えています。

○久元市長

あとニーズが高いのは空調ですか。体育館には空調が全くないのでしょうか。

○教育委員会事務局

一定程度設置はしておりますが、体育の授業や部活動で活用する時に、ましてやこの時期でも、十分効果があるという状況にはなっていないのが現状です。この辺りは改善していきたいと、現在考えているところです。

○久元市長

市立高校の魅力化については、この辺で一区切りにしたいと思います。

プランの策定に入っていただいて、これは来年度予算の前にはプランを決定するということですよね。今日の議論を踏まえて、教育委員会の中でも議論していただき、プランを作っていただくと思いますので、「これは絶対言っておきたい。」「これは絶対に入れるべきだ。」というご意見があれば、出していただければと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

今日出していただいた意見を踏まえて、ニーズの高い空調、それからトイレですね、これらについてもしっかり改善をしていただけるプランを作っていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

## ３．議題　KOBE◆KATSU（コベカツ）の開始

○久元市長

２番目のテーマの KOBE◆KATSU については、９月にスタートして、政令指定都市で初めて本格的に導入したので、全国的にも注目を浴びており、様々な課題も指摘されているところですが、

現在の取り組み状況について、教育委員会事務局から、説明お願いします。

資料２「KOBE◆KATSU の取り組み状況等」について、教育委員会事務局より説明。

○久元市長

KOBE◆KATSU については、教育委員会で何回も議論されていると思いますけれども、今日は総合教育会議ですので、今西副市長、企画調整局長、文化スポーツ局長はじめ幹部も出席しております。市長部局に対するご意見などもありましたら、お聞かせいただければと思います。

９月から始まったばかりですが、実際に始まってみて教育委員会の皆さまどう感じておられるかを含めて、お聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○今井委員

議論が始まったときは、本当にこのクラブがどのくらい集まるのだろうという、すごく不安なところから始まりましたが、本当にいろんな方の尽力があり、期間を経て、1,000 を超えるクラブで無事にスタートが切れたということについて、本当にご協力いただいた皆様、現にいただいている皆様に、心より感謝を申し上げたいと思います。

とはいえ、今後の取り組みにもありましたけれども、まだまだ色々課題がこれからも出てくるかもしれませんし、今既に浮かび上がっている課題もありますので、そこはしっかり見ながら対応していく必要があると思っています。

他方で、これまでは学校の顧問として先生方が放課後の時間を割いてきたわけですけれども、そこから一定時間ができたということで、学校で先生方がどう関わるのか、そして放課後の子どもたちが別の過ごし方をする中で、各学校でどのような取り組みが展開されていくのかということも見ていきたいと思っています。

〇本田委員

私も今井委員と同じですけれども、最初は、本当にどうなるのかしらと思っていましたが、すごくワクワクするような、今までなかったような活動もたくさんありますし、コベカツフェスティバルやコベカツ自体がまさに先ほど話のあった、高校との連携や地域との繋がりに関連すると思うので、こういった取り組みから、今まで以上にもっとクリエイティブな発想で子どもたちが育っていくのではないかと、すごく期待を持っています。

実際に、まだ他のところはやっていない中で神戸が先陣を切ってやっているということで、課題もどんどん出てくると思いますが、一つひとつ皆さんと議論しながら解決していけたらと思っています。

〇正司委員

８月の体験入会の段階で 800 以上のクラブが動き出していたので、そのおかげで９月を迎えても急に変わったという印象を持たずに進んでいるのではないかと思います。生徒の皆さんもそうではないかと思います。一方でまだ大会が残っている、文化祭が残っていてプログラムが残っているため、以前の姿を残したままこの後移行していくという話も聞いていて、我々も安心しています。

もちろん 100％何の問題もないということではなくて、それぞれいくつかの問題は出てくると思いますので、それに応じて体制などを検討していくことになるだろうと思います。この間、警報が出ましたが、その際の対応なども気になるところですので、色々考えていきたいと思います。

私たちが中学生だったころと比べて、今の部活動は全然雰囲気が変わっているのを見て、更にこれから生徒数も減っていく、各中学校の部活動をどうしていくのかということを考えたときに、この移行で、地域でこういう形の活動が立ち上がるというのは良かったと思うとともに、これで、学校や先生方と生徒との付き合い方も、更に色々なバリエーションができるようになるのではないかと、そこは期待を持っているところです。

○吉井委員

この間、ロータリークラブで話をしていたときに、ちょうど KOBE◆KATSU の話題が出ました。我々、関係者は、KOBE◆KATSU について、既に良い仕組みですねと十分理解してくださっていますが、一般の方々は、まだあまり承知されていない状況でした。私もその場で色々説明させてもらいましたが、十分説明しきれなかったので申し訳ありませんが、もう少し教育長には頑張っていただき、メディアを介して、なぜ今 KOBE◆KATSU なのかということについてのアピールを、関係者だけではなく、一般の皆さんにも伝える機会をもっと増やしていきたいなと思っています。

○久元市長

情報発信ということから言うと、あらゆることについて「PR が不足している。」という声はあります。ただ、これは私の見方ですけれども、KOBE◆KATSU については、今までかつてないほど全国的にも報道されていると思います。神戸新聞では連載で、進んでいること、あるいは課題、様々な指摘も含めて取り上げていただいています。テレビでも報道されています。全国紙でも結構報道されています。

ただ、最近はテレビも見ない、新聞も読まないという人もたくさんおられるので、なかなか難しいところもあるとは思いますが、市長部局の広報戦略部も含めて、更に情報発信には努めていきたいと思っています。

○山下委員

他の委員からもありましたように、私も、開始されて少しほっとしていて、今のところ順調な滑り出しということで、大変安堵しております。

開始前から他の市町村からも非常に注目されていて、視察や問い合わせもひっきりなしにあるということで、その点で大規模自治体としては初の試みでもありますので、他のところのモデルにしていただけるようなものが、今のところ始まっているのかなと思っています。

ただ、PR や周知という点では、やはりまだ難しさも残っていると感じています。先日新聞報道

を拝見していると、「部活動がなくなることによって教員のやりがいが奪われる。」という見出しもありまして、これは当初から懸念されていたところでもありますが、実はそうでもないところもありますし、施策を展開する側としては、決してそういうつもりではないところもあります。ただ、こうした不安の声もあるのは事実ですし、批判的にご覧になる方もおられると思いますので、じっくりと対話するような機会があれば良いかなと思っています。逆に、これをきっかけにして、中学生は一体どんな過ごし方をしたら良いのだろうか、学校にいる時間も、学校にいない時間も含めてどう過ごしたら良いのだろうかということを、本当は国民全体あるいは神戸市全体で、大人の側が考えるべきところがあり、その意味で、そういった役割を担っているのかなと思います。

各地域で協力してくださる方々がたくさん出てきてくださっているのも、本当に心強いと思っています。学校の教員だけではできないし、実は大人の側が次の世代に向き合うきっかけになっているように思っています。

〇久元市長

部活動がなくなって、教員のやりがいがどこにあるのかというご指摘もいただきました。これは先生方によってだいぶ違うと思いますが、教育委員会事務局、いかがですか。

〇教育委員会事務局

もちろん、部活動にも部活動として大きな役割がこれまでもありましたし、顧問として担っている子どもたちとの関係性、保護者との繋がりというのは、学習活動とはまた違った大きなやりがいがあったのは事実です。

ただ、やはり学校だけではなく、斜めの関係の大人たちと関わっていくということを、部活動があることで阻害していた部分もあったように、私は学校現場で思っていました。

もっと子どもたちが地域の方々とつながりたいと思っているときに、どうしても部活動があるからということで妨げてきた部分もありますので、先ほどから委員の皆様もおっしゃってくださ

っていますけれども、やはり地域とつながるということ、中学校はこれからそういう繋がりを大切にしていくということを子どもたちや保護者の方々にも伝えていく役割を、新たな役割として中学校に与えていただいたのかなというふうに思っております。

〇久元市長

ありがとうございました。

山下委員からの過ごし方と関連するかもしれないですし、もう少し広い観点からのお話かもしれませんが、部活動がなくなって、自分のところの中学校や近隣の中学校では、自分が入りたいコベカツクラブが見つからないので、結局、部活動がなくなって、する活動がなくなった、したい活動がなくなったという指摘もたくさんあると思いますが、その辺の状況はいかがでしょうか。

〇教育委員会事務局

先ほどご指摘いただいたような、自分が通っている学校、あるいは近隣校では、したい活動が見つからないという声が一定あるのは事実でございます。

その中でも、各ご家庭が工夫をしながら、少し離れた場所になりますけれども、公共交通機関を使って参加していますという声も多くいただいております。

我々としても、今のコベカツクラブの状態が完成形ではなく、地域で立ち上げたいという声があれば、それを素早く受け取って、子どもたちが活動しやすい環境を作っていきたいと考えています。

〇久元市長

それでは、福本教育長から全体的な総括をしていただければと思います。

〇福本教育長

まだまだこれからだという気持ちでいっぱいです。

ただ、やはりこれまで取り組んできて一番思ったのは、部活動に対する認識というものが本当に大きく違っていたなということです。これからの KOBE◆KATSU の中身を説明するよりも、今の部活動がどんな状態にあるかということを説明する方に時間がかかりました。

私は５年前まで学校現場で校長をしていましたので、コロナ以降、本当に部活動がしんどくなっている状態を目の当たりに見てきました。そこから KOBE◆KATSU をスタートしたにもかかわらず、20 年前や 30 年前の、部活動が中学校の中ですごく位置を占めていた時の状態から KOBE◆KATSU になったかのような議論がたくさんあり、説明して理解していただくことに本当に苦労しました。

そのギャップを放置していたら、かわいそうなのは結局子どもたちです。私は部活動が大事だと思っていましたし、自分の人生そのものでしたけれども、最後の方の部活動は本当に大変だったということや、入りたくない子もいるという議論が、部活動は素晴らしいと言われて、どうしてもかき消されてしまうのです。

でも、実はいじめの問題もたくさん起こっていたし、同調圧力で苦しんでいた子もいました。そういう議論が全部飛ばされて、部活動が美化されることに対して、私は校長時代の最後の頃、これは本当に解決していかないといけない、やりたい子もできないと考えており、KOBE◆KATSU をスタートしました。今は明日、部活動が終わるかもしれないことから、部活動ガチャともいわれていますが、そういうことが前提で議論されなかったことで時間がかかりましたが、ようやくそうした考え方も浸透してきました。けれども、実施するのであればやはり夢を持ちたいし、希望も持ちたいので、あまりマイナスなことばかり言うのもどうかと思いますが、この２年間を総括すると、やはりそういうことがあったなと思っています。

子どもたちのためになるようにするには、その辺の意識を周りの大人が変えていかなければならないと強く思っているところでございます。

〇久元市長

ありがとうございます。

いずれにしても、自分自身の経験で、かつて幅広い世代の人が、中学時代に部活動で鍛えられ

たとか、今の自分は部活動のおかげだとか、授業よりも部活動が命だったとか、あるいは部活動で一生の友達ができたとか、そう思っている人はたくさんいるわけで、その部活動がなくなるということは、やはりそれを残念に思っている人はたくさんいるわけです。ただ、それは過去の話ですから、乗り越えながら９月にスタートできたということで、教育委員会事務局や実際に中学校現場の先生方のご努力、本当に大変だったと思いますが、スタートができたことについては感謝を申し上げたいと思います。ぜひ前を向いて、まだ課題もたくさんあると思いますけれども、一つずつ潰していくということと、教育委員会の中で議論し対応していただくということと同時に、市長部局としても、更にこういうことをやった方が良いということがあれば、おっしゃっていただければと思います。

## ４．議題　神戸市教育大綱について

〇久元市長

それでは、３番目のテーマ神戸市教育大綱についてです。

策定してちょうど 10 年になるのですが、10 年間の総括ということを含めて、本日の議論のテーマにさせていただきました。

個別の文言をどう変えるということよりも、７つの柱それぞれに沿ったこれまでの総括を、まず教育委員会事務局から説明をお願いします。その後、議論に移りたいと思います。

資料３「神戸市教育大綱について」について、教育委員会事務局より説明。

〇久元市長

教育大綱をつくって 10 年になるわけで、小・中学校の教育に関する全体を総括するような説明をしていただいたわけですけれども、教育大綱を今後どうしていくのかということも含めて、小・中学校の教育のあり方全体になるかもしれませんが、どんなことでも結構ですから、ご意見をい

ただければと思います。いかがでしょうか。

〇正司委員

教育委員のメンバーでも一度議論させていただきましたが、７本の柱の立て方自体は、10 年たっても全然古くなく、十分通用するのではないかと思っています。

それぞれの表現の仕方や、「多忙化対策」というのはもう少し前向きな表現が良いなという議論や、並べる順番を考えても良いかなという議論はありましたが、それ以外は良いのではないかと思っています。

一方で、教育大綱は第２期の計画を踏まえながらの表現になっていて、当時は「人は人によって人になる」というフレーズがありましたが、今は第４期で、「子が主役の学校づくり」となっていますので、そのあたりは変えないといけないなという議論がありました。

ここから先は自分の意見ですが、今は小・中学校のみとなっています。社会教育まで広げるのは少し広がり過ぎかなと思いますが、先ほど高校の話をしたばかりということもありますし、若い人たちの教育、小・中・高くらいまでをイメージしてカバーするということはあっても良いのではないかと思います。今の項目でも全然カバーできているように思いますので、そういう考え方で、小・中学校を中心にくらいの表現でも良いのではないかと思っています。

高校でいうと、通学定期の無償化の影響もすごく大きいという話をよく聞きます。行きたい高校へ、定期代は関係なく通えるようになり、いわゆる学区があった頃の学区外からきている子もたくさんいて、プラスの評判となっています。神戸市の施策はほかにもまちなか自習室や居場所づくり等行っており、それらを踏まえると、小・中学校のみという表現は市立の学校のみを対象としているように見えるので、神戸市の世代全体を対象にしているということを打ち消すような表現はない方が良いのではないかと思いました。

〇本田委員

私も皆さんと議論をしたときに申し上げましたが、大きな柱を変える必要はないと思っていま

す。

ただ、この 10 年で、例えば AI やスマホ等、世界が変わっている部分があります。例えば「１．学力の向上」といっても、どういう学力なのか、生成 AI が出てくることによって、もっと守らなければならない学力がより明確化していると言いますか、今までとは少し違う取り組みが必要なのではないかと思います。

また、先ほど正司委員もおっしゃっていた、教員の多忙化対策というのは、この 10 年間でかなり進んでいて、多忙化対策だけではなく、教員の職場環境の充実と言いますか、「６．子供たちが健やかに育つ環境を整備します」くらいの広さを指しても良いのかなと感じています。

ただ、大きな指針とはあまり変わりがないところと、先ほど正司委員が言われたように、高校を含めても同じ柱で議論ができるのではないかと私も思います。

〇正司委員

施策の中で、学校運営協議会を小・中学校だけではなく高校、特別支援学校も含めて設置したというのは、地域とともに子供たちを育てるということにプラスになっていると思います。実際、KOBE◆KATSU の展開においても、学校運営協議会を通じて地域の受け皿づくりにつながったという話も伺っています。

他都市の方からは、「うちの市では学校運営協議会、コミュニティ・スクールが、なかなか進んでいない状況です。神戸市良いですね。」という話も聞いたりします。教育委員会関係者だけでなく、私の専門の交通関係者からもそういう声を聞くことがありますので、まちづくりという面でもプラスの効果があると考えています。

〇今井委員

教育委員会で議論させていただいたまとめは、今、委員の皆さまが説明してくださったとおりに思います。

私個人の意見を追加で申し上げますと、「学力の向上」という表現についてです。中身を見ると、

生きる力という広い意味で書かれていますが、見出しだけを見ると学力だけなのかなと思われてしまわないか不安があります。改定にあたっては、広く、学力、生きる力、体力等も含めて、盛り込めると良いのではないかと個人的に思っています。

また、今の大綱は本当に整理された良い内容だと思いますが、子どもたちが知っているか、保護者が知っているかというと、なかなかそうではないと思います。今回改定を進めるのであれば、子どもたちにも読んでもらえるような子ども版や、保護者にも見ていただきやすいよう、気を付けながら改定できればと個人的に思っています。

〇吉井委員

概要につきましては、正司委員がおっしゃったとおり、７本の柱はこのままでも良いのではないかと思っています。

個人的には、例えば「３．学校の組織力強化」というところでで、今、既にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、スクールサポートスタッフ等、従来では考えていなかったような組織化が進んでいるので、そこはやはり、しっかりと記載が必要ではないかというふうに思っています。

〇久元市長

10 年前は、学校の組織について様々な問題があって、色々な問題が噴出していた時期でした。この教育大綱をつくった後も、全国的に報道に取り上げられるようなことがありました。つくった当時は、そういうことも相当強く意識しながら書かれていると思います。

その後、教育委員会のご努力によって学校のガバナンスというものが相当改善されてきたということは事実ですから、こういうタイトルで良いのかというのは、少し議論する必要があるような気がします。

「４．教員の多忙化対策」というのも、もう少し前向きな、もう少し幅広い観点を入れた見出しにするのが良いのかなと。思いつきですけれども、教員の成長環境というようなことも含める

のかどうか、その辺りは少し考えたいと思います。

○山下委員

私も柱については基本的なコンセプトとして、変更しなくても大丈夫じゃないかと。

文言は確かに少し別の言葉に置き換えた方が良いところもあるのではないかという気はしております。今ご指摘のあった「４．教員の多忙化対策」というよりは、先ほど KOBE◆KATSU の議題のときにも出ましたけれども、やりがい等の向上などにシフトしても良いのではないかと思っています。

神戸市の教員採用の倍率は、他の都市や地域に比べても、今、非常に高い倍率を維持できている状況です。ただ、これから先どうなるかは少しよく分からない、不透明な部分もありますので、改革と言いますか、そういう状況を維持していくための取り組みというのは、順風の時にやった方がスムーズに進むのではないかと思いますので、逆風になることを見越して先手を打つということで、少し文言も考えていく必要があるのではないかと思います。

あと、「５．学習の機会均等を確保します。」という柱ですね。これは、政令市として非常に高く評価できるのではないかと思っています。多様な子どもへの配慮という表現もあるとは思いますが、やはりきちんと「学習の機会均等」という文言が入っているところがすごく良いと思っています。こういうところについては、ぜひ継続して生かしていただければありがたいと思いました。

○久元市長

「機会均等」というのは非常に重要なテーマだということを意識したつもりですので、私もここのタイトルはぜひ維持していきたいと思いますし、10 年前に比べていろんな意味で格差が拡大しているわけですから、そこを意識した改定にしたいと思います。

あとは、この 10 年の間の変化というものをしっかり取り込んでいかなければいけないということで、例えば「６．子供たちが健やかに育つ環境を整備します。」であれば、バーチャルな空間が

広がっている中で、やはりリアルな世界での経験を大切にしていかなければいけない。当初からそういう問題意識はあったと思いますが、AI の登場によって一変したのか、あるいはバーチャルの世界というものがより現実味を持つようになったのか。そこも含めて考えないといけないと思っています。どの部分にどう書けば良いかは難しいですが、その辺りは教育委員会事務局や市長部局でも議論しながら考えていきたいと思います。

あと、やはり人材を確保していくということは重要で、山下委員からもお話がありましたけれども、他のところと比べて神戸市は教員採用の倍率が良いですよね。教育委員会事務局では、どういう風に分析されていますか。なぜ神戸市は教員採用試験の評判が良いのでしょうか。

○教育委員会事務局

資料上のグラフにも出ておりますように、特に中学校の教員については、受験者が増えてきております。

やはり影響としては、KOBE◆KATSU の影響がかなりあると思っています。KOBE◆KATSU を発表して以降の試験は前の年より 100 人増えまして、今年度もまだ速報値ですけれども、更にもう少し増えているような状況でございます。いずれ他の自治体も部活動の地域展開に追いついてくると思いますので、今優秀な人材が集まるうちにしっかり確保しておきたいという思いです。

○久元市長

ありがとうございました。

KOBE◆KATSU 以外に考えられる要因はありますか。

○教育委員会事務局

働き方改革が大きく進んでいるということも、非常に好条件と言いますか、受験者の神戸市を選ぶ大きな要因になっているのではないかと思います。

〇久元市長

課題としては、メンタルヘルスの問題があり、休職者が増えているということだと思います。全国的に見ても同じだと思いますが。もちろん予算の時期にも議論して必要な対応を講じていると思いますけれども、より強化する必要があるでしょうか。教育委員の皆さま、何かご意見がありましたらお願いします。

〇本田委員

メンタルヘルスの問題というのは、教職員だけでなく、日本全体で、子どもたちについても課題があるのではないかと思っています。先ほど申し上げた、教員の多忙化ではなく、教員の働く環境を整え、充実させるということにおいて、戻りやすく、働きやすいよう、メンタルの部分を含めて強化していくと良いと思っています。ここ数年、産業医や保健師を配置していただいています。

〇久元市長

今、産業医や保健師を配置していますけれども、もっと強化する必要があるのかどうか、その辺りはどうですか。教育委員会事務局からお願いします。

〇教育委員会事務局

やはり体制強化をさせていただいたことで、学校訪問や直接的な相談対応について、かなり充実させていただいております。それによって教員本人が早めに気付くことができ、早めに休んでもらうという傾向も出てきておりますので、一旦休職者の数字としては増えている部分もございます。

まだ、休職者数を抑えるところまでには至っていませんが、引き続き分析をしながら、どういった対応が必要なのか、どのような取り組みが効果的なのか研究を続け、取り組みを強化していきたいと考えてございます。

〇久元市長

あともう一つ、10 年前にも相当問題になっていたのが、スマホとの付き合い方ですね。フォーラムを１回やりまして、私も出席させていただきましたし、教育長も出席されました。継続的に、子どものスマホとの付き合い方について、何度も議論をしてきましたが、やはりスマホを使っている時間が長ければ長いほど学力にも影響が出る。おそらく集中力にも影響するのだろうと思います。

これに対する対応として、市長部局としては、できるだけリアルな世界に触れてもらおうとしています。特に外遊びやスポーツ等、KOBE◆KATSU もそれに対する有効な答えだと思います。ただ、スマホへの対応としてはもう少し強化して、AI やスマホ等、そういうことも含めて明確に書いていかなければいけないのではないかと思っています。

継続的な取り組みということについて、何か良い発想や方法はありますでしょうか。委員の皆さま方、いかがでしょうか。フォーラムを１回やったぐらいでは、なかなか変わらないと思いますが。大人でもスマホの虜になってしまうので難しいと思うのですが。

〇本田委員

スマホ問題については、大分研究が進んでいて、明らかに子どもの学力が下がっているとか、集中力が切れているという結果も出ています。諸外国でも、スマートフォンだけではなくて SNS について、15 歳未満は使用禁止にするとか、国を挙げて制限をし始めているようなところもあります。日本全体で考えることかなとは思いますが、そういう正しい情報を、学校を通じて親御さんにも知ってもらうというところはすごく重要ではないかと思います。保護者だけでなく、市民全体に。大人が子供を守らないといけないと思います。

もちろん大人もスマホ依存になっていますが、子どもの脳への影響というのは、大人とはまた全然違うのではないかと思いますので、知識を皆につけていただいて、皆で子どもを守っていくということを、市全体で考えていくことが必要なのではないかと思っています。

○久元市長

今のご指摘については、市長部局の方でもしっかり共有して取り組んでいきたいと思います。だいたい議論は出尽くしたと思いますが、教育長からお聞かせいただけますか。

○福本教育長

私も同じように、柱は全然動かす必要はないと思っています。

今井委員が先ほどおっしゃっていたように、教育大綱ができた 10 年前を思い出しますと、学校現場に居た身としては、申し訳ないのですが、別の世界のことだったような感じもします。

だからこそ、子どもたちの目に触れるような形にしていかなければいけないと思います。書いてあることは、結局は子どもたちのために書いてあるわけですので。今後どういう形で改定するにしても、もっと保護者や子どもたちが身近なものとして捉えられるような工夫はしたい、そのように考えています。

○久元市長

ありがとうございます。

それでは、本日のご意見を踏まえまして、教育委員会、そして私ども市長部局でも議論しながら、次回の総合教育会議に具体的な変更案をお示ししたいと思います。

それでは、本日の議事を終了させていただきます。

## ４．閉　　会